



Title	金水敏先生・飯倉洋一先生をお送りする
Author(s)	岡島, 昭浩
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



金水 敏先生近影



飯倉洋一先生近影

金水敏先生・飯倉洋一先生をお送りする

岡 島 昭 浩

金水敏先生と飯倉洋一先生が同時に定年をお迎えになり退職する、ということは前々から分かっていたことではありますが、その日がまもなく訪れるということは、まことに大変なことです。折しも、大阪大学の文学研究科が言語文化研究科とともに人文科学研究科という新しい研究科として出発する際に両先生がいらっしゃらなくなる、というのは、我々にとって、実に不安を感じることです。

金水先生が神戸大学から大阪大学に着任なさったのは一九九八年で、その時、教員は文学部に所属していましたが、翌一九九九年から、大学院重点化で教員は大学院文学研究科に所属することになりました。飯倉先生が山口大学から大阪大学に着任なさったのは、二〇〇一年で、そこからは、二〇〇七年の大阪外国語大学と大阪大学の統合など、多くのことがありました。このように大学の姿が変わってきたのは、大学という場のあり方が、また人文系の学問のあり方が、問われ続けてきた、ということと大きく関わるわけですが、両先生は、そのような社会情勢を強く意識なさり、さまざまなことに取り組んでいらつしました。

金水先生が文学研究科長・文学部長であった二〇一七年三月の卒業・修了式の日、文学部・文学研究科の卒業生・修了生に向かつてお話になった式辞は、文学部での学びとはどのようなものであるのか、ということについて示され、大きな反響を呼びました。金水先生がご自身のブログに式辞の原稿を載せていらしたものが、卒業式から四ヶ月ほど経った頃にツイッターで取り上げられ、そこから反響が広がり、新聞などでも取り上げられ、さらに拡散していったのです。この式辞は、文学部・文学研究科を卒業・修了する学生に向けられたものですが、文学部などの必要性を問うような、いわゆる「外部」に対しても、この発言は届き、多くの人に文学部的な学びの大切さを意識させることとなりました。

飯倉先生は、近年、「古典」をめぐる議論に関わっていらっしやいます。当初は、「和本リテラシー」の普及に関するところ、つまり、行書・草書で書かれた漢字や変体仮名、いわゆる「くずし字」で書かれたものを、多くの現代日本人（文化人でさえも）が読めないことについての問題に取り組むところからでした。人々が崩し字を学ぶための国際的な環境作りをめざして科研費を獲得し、スマホなどの端末を用いて学習する「くずし字学習支援アプリ」（愛称「E」）の開発に至ったのです。このアプリは、ダウンロード数が二十万に近付く勢いで、日本文学などを学ぶ人がくずし字を学ぶ際の必須のツールとなったのはもちろん、これまで崩し字の存在を意識していなかったような、一般の歴史好きの人たち（オタクの人たちも）に対しても、崩し字への学習意欲を呼び起こすことになったのです。また、学校教育の「国語科」における「古典」の必要性についての議論へも参画して、「古典」とは何か、なぜ古典を学ぶべきなのか、という根本的な問いについての議論に当たっていらっしやいます。

このように、両先生は、文学部的な学びについて、積極的に関わってこられたわけですが、そのようなことに取り組んだからと言って、学問的な生産が疎かになるようなことは、感じさせないものでした。両先生とも、それぞれの領域で多くの成果を挙げ続けていらっしやいます。大阪大学を退職なさったあとも、学問的なことと、文学部的な学びについての評価を高めて行くこととの両面で、私たちを導いて下さるものと思っております。